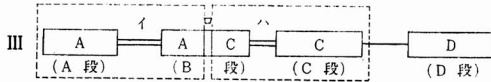


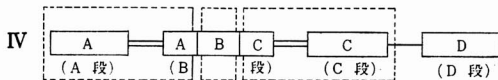
図 4



Ⅲのような場合、B段は前段とはAという内容でつながり、後段とはCという内容でつながる。B段の中のAとCの結びつき口が、その強さにおいてイ、ハよりも劣る時はⅡと同じであろうが、逆にロがイ、ハより強い時はB段は分裂してしまう。

さらに、B段の中にA、B、Cの内容が混在してくると次のようになる。

図 5

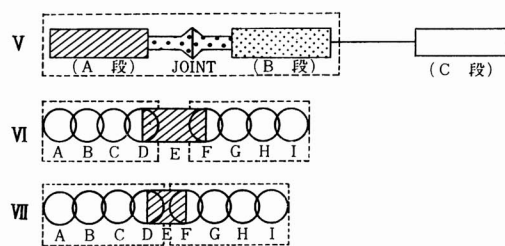


要するに、Ⅲ、Ⅳのモデルに見られるように、文章段落のひとつを分割しなければ意味としてのまとまりをつけれないということがおこる。

そこで、Ⅲ、ⅣのB段のような、前段にも後段にもまとめにくく、それでいてつながりのある段落を「橋渡し」的なものとして考えてみたい。これを Bridge-paragraph と呼ぶことにする。

「つなぎの段落」という考えは従来もあったようであるが、それは文章全体の本筋に余り関係ないこととして軽く扱われ、いわゆる「意味段落」にまとめていく時には、無造作にどこかへ含めてしまうことが多かったのではなかろうか。だとすれば、それは Bridge-paragraph というより Joint-paragraph というべきものであろう。次のVは Joint-paragraph であり VI、VIIが Bridge-paragraph である。

図 6 図 7 図 8



文章は改行ごとに切り離されたものではなく、段落間に何らかのつながりがあるわけであるから、当然、VI、VIIのように考えるのが段落の接続モデルとしてはふさわしいと思う。

Bridge-paragraph は、前後をつなぐ (Joint) というだけでなく、文章の筋道にある方向を与えるものということができる。だから、いずれかの段落にこれを含めるよりも、独立した段落として考えていくことが、文章を大きくまとめていくことを自然で無理なくさせるいき方といえる。そして筆者の書く過程における段落意識が、改行された「文章段落」の中に見いだせることを考え

ば、文章全体の筋にある方向を与えている Bridge-paragraph は「筆者の段落」にせまるためには重要な部分だと言うことができよう。

4. Bridge-paragraph と「筆者の段落」

具体例で Bridge-paragraph と「筆者の段落」との関係を考えてみよう。(紙面の都合上、部分掲載。実際の文章の段落は () で示された番号による。)

(1)	自分が将来どういう仕事をするようになるかということは、なかなかわからない。「ただなんとなくやりたいと思うものはいろいろある。小さいときほど自分の能力以上のものになりたがるもので、列車の走る土手のわきで手をふっている幼い子どもたちは、機関車になりたいときえ思う。機関車を動かす運転手になるのではなしに、一足飛びに機関車になりたかったり、また飛行機になろうと真剣に夢みたりする。
(2)	それからだんだんに、それはとうてい無理であって、むしろこっけいなことであるとわかると、人間の中で偉い人になろうとする。が、その偉い人というのは、外見上の偉さである。やがて、地位や肩書きがらびあってもなんにもならないものだとわかり、人間そのものの偉さ考えるようになる。「そうになったときに、わたしどもにはわかれ道が見えてくる。それがほうぼうにあることに気がつく。
(3)	人生の岐路などというものは、上の学校へはいるか、働きにでるかというようなときのみあるものではなく、「毎日の、ほとんど瞬間ごとに巡り合うものである。
(4)	わたしは、きょうも家にいて仕事をしながら、やはりたくさんのわかれ道を通ってきた。「そして、そこを通るたびに、少しでも人間として育つように、豊かな者になるように心がけたつもりである。

「わかれ道」 車田孫一：光村……新中等国語 1

(2)の点線の部分は(1)に含めてもよさそうである。とくに第1行はかなり(1)と密着している。ところが、(2)の後半の囲みの部分は(3)への密着度が高い。(2)を Bridge-paragraph として筆者の段落意識を読んでみよう。

こうしてみると、(1)と(2)の間を筆者がどうしてわけたのかははっきりする。なるほど、文のつながりでいえば「それからだんだん……それはとうていむりであって……」の接続語、指示語から考えて点線のようにわけてしまいたくなる。しかし、筆者がここで改行したのはそれなりの理由が内在していたはずである。

改行の焦点となっているものは「将来の道がわからない。」ことと「わかれ道が見えてくる。」こととの対比である。筆者は「人間以外のもの」に将来の道を探ることと「人間」に将来の道を探ることとははっきり区別しようとしているのである。その意識が(1)と(2)とを区分させたのであろう。そして、「人間」の中でも地位、肩書きを望むことは、「人間そのもの」の姿への希望ではなく「機関車・飛行機」を望むことと大差はないのだという意識もあって、それを否定したところに論旨の展開をもとめている。

段落	段落の内容	改行の焦点とされているもの
(1)	○自分が将来どういう仕事をするようになるかわからない。 ○小さいとき——能力以上のものになりたがる。(機関車、飛行機)	○将来のことはわからない。 「道がわからない」 ○人間以外のものでもなりたがる。
(2)	○「もの」になろうとするのは馬鹿馬鹿しい。 ○人間の中で偉い人(外見上の偉さ、地位、肩書き)になろうとする。 ○人間として偉い人(内面的な偉さ)になろうとする。	○人間以外のものになることは馬鹿馬鹿しい。 ○人間になろうとする。 外見上の偉さも本当の偉さがわかる。 ↓ 「道が見えなくなる」 ○内面的な偉さ ○人間として育つわかれ道は、ほうぼうにある。
(3)	○人生の岐路は毎日の瞬間にある。 ○この岐路をしっかりと見つめる心構えは自分の持っているものを知ることに通ずる。	○毎日ある。 ○道を見つめる。 ↓ 「道を見つめる」
(4)	○わたしはきょうもわかれ道を通ってきた。 ○わたしは豊かな人間になろうと心がけている。	○わたしは今日もわかれ道で成長しようとする努力した。 ↓ 「道を見つめる」